＜研究ノート＞

武蔵七党系図（村山党系図）と難波田氏

早坂廣人（はやさかひろひと）（難波田城資料館）

はじめに

難波田氏の由来については、武蔵七党系図や金子氏系図に基づき、承久の乱で討死した金子小太郎高範の子孫に、戦功として難波田の地が与えられたのだろうと記述されることが普通であり、筆者も市民向け講座ではそう説明してきた。一方では、系図での断片的な記述であり、確定的でないことも常識であろう。

本年3月から開始した企画展「難波田氏とその時代」で、全体構成と中世を担当した。展示準備の過程でいくつかの写本・版本の記載を比較した。その延長として、七党系図全般に及ぶことはできないが、難波田氏およびそれを含む村山党系図の記載についての所見を記録しておきたい。なお、国公立機関の所蔵本について、公開されたデジタルライブラリーを活用した。

１）村山党写本の系統分類

1.研究史　ここでは「七党系図」の成立と写本系統に関する研究史を述べる。

伊藤一美(1975)は、「七党」という概念は南北朝～室町期に軍記物語をとおして普及したとした。また“系図所載の人名が、鎌倉末、南北朝期 … で切れ … 系図自体の原型がそれをへだたること遠くない時期に成立”とした。

萩原竜夫(1986)は“鎌倉末期までに一応成ったものに、部分的に増補が加えられ”たとした。また、続群書類従の七党系図は諸家系図纂が底本だと指摘し、東大本が善本であると評価した。

加藤功(1989)は“従来、書誌学的な研究が十分とは言えない”として、諸本を集成した。それらを3類系に分類し、安永本と東大本を一類系、静嘉堂本を二類系、山中本を三類系の代表とした。比較により“概して一類系の記載は簡略で … 原本に近い … 可能性が高い”とした。山中本は、諸家系図纂を底本に日比谷本で校合し、多くの追記を加えたものとした[*1]。

菊池紳一･加藤功(1991)は、山中本を除く九例をＡ型とＢ型に分類し、個々の写本の特徴も指摘した。Ａ、Ｂは加藤(1989)の二類系、一類系に対応する。それ以外に諸家系図纂所収の党家別系図があり、他と比べて詳細だとした。

渡政和(2017)は、埼玉県が購入した写本を検討し、加藤の二類系に当ること、同類の写本の奥書の検討から、二類系が新井白石旧蔵写本を源流とするであろうことを論じた[*2]。

2.村山党系図による分類　七党全般を比較する時間がとれないので、村山党系図のみの比較により分類した。検討の対象は表 1 の 17 写本である[*3]。観察欄の DL はダウンロードしたネット公開画像、PH は資料調査で撮影した画像で、これらは存分に観察した。CH は県立文書館所蔵 CH 本(マイクロフィルムを印刷製本したもの)を限られた時間で観察したので精度が劣る。

校注を除いた記述が少ないものから多いものへ3群に分けた。第1群は、人名の配置も丁の切れ目も一致する 4 例を 1A とし、丁の切れ目のみ異なる菅本 A を 1B とした。以上 2 者は多世代を縦に並べる。系線の折り曲げが顕著な日比谷本を 1'とした。第 2 群は、人名の配置が一致する 6 例を 2A とし、系線の折り方が異なる根岸本と山中本を 2B,2C とした。分脈系図は系線の折り方が異なり、まとまった欠落があるなどの相異により 2'とした。第 3 群の 2 例は系線の折り方が異なるが、今回は分類しない。

題名	所蔵	旧所蔵	書写者	年代
a 武蔵七党系図	国立公文書館	和学講談所	「多賀谷」印有り	1779
b 武蔵七党系図	東大史料編纂所	—	齋藤宏。福井安宅校	1887
c 党家系図	尊経閣文庫	不明	不明	不明
d 党家系図	宮城県図書館	伊達伯観瀾閣	不明	不明
e 七党系図	茨城大学図書館	菅政友家	不明	不明
f 七党	都立中央図書館	不明	加藤直臣	1822-56
g 武蔵国七党之系図	国立公文書館	昌平坂学問所	不明	1813
h 武蔵国七党之系図	埼玉県博	佐佐木信綱他	穂積惟	1847
i 武蔵七党系図全	尊経閣文庫	不明	不明	不明
j 武蔵七党系図全	静嘉堂文庫	温故堂文庫	春宣高藤	1879
k 武蔵国七党之系図	茨城大学図書館	菅政友家	菅紀一郎	1884
l 武蔵七党系図	国立国会図書館	不明	郵岡良弼	1899
m 武蔵七党系図	国立国会図書館	甲山文庫	根岸武香	1865
n 武蔵七党系図	加藤功	前島康彦他	山中義臣	1856
o 本朝武家諸姓分脈系図	国立国会図書館	甲山文庫	田畑吉正？	～1845?
p 諸家系図纂	国立公文書館	昌平坂学問所	不明	1790-1868
q 続群書類従	国立公文書館	和学講談所	塙保己一集,忠宝校	～1863

本稿略称	加藤	県史	本稿	観察	備考
a 安永本	一	B	1A	DL	多賀谷→講談所→浅草文庫
b 東大本	一	B	1A	CH	鈴木真年蔵本を書写
c 尊経閣A		B	1A	CH	
d 観瀾閣本			1A	CH	
e 菅家A			1B	DL	
f 日比谷本		B	1’	CH	伴信友1822を書写
g 昌平校本		A	2A	DL	「文化癸酉」朱印
h 弘化本			2A	PH	栗原信充蔵本を書写
i 尊経閣B		A	2A	CH	
j 静嘉堂本	二	A	2A	CH	浦和で書写
k 菅家B			2A	DL	(伝白石本を書写した)保己一旧蔵栗田寛蔵本を書写
l 郵岡本		A	2A	DL	目次では武蔵国七党之系図。保己一旧蔵彰考館本を書写
m 根岸本		A	2B	DL	目次では武蔵国七党之系図。講談所の塙蔵本を書写
n 山中本	三		2C	PH	系図纂と日比谷本で校訂
o 諸姓系図			2’	DL	
p 系図纂/昌			3	DL	原本は1692成立か
q 続類従			3	DL	「武蔵七党系図」で校合

oは、七党系図の例に挙げられたことがないが、 mやqの校注でoと
のみ対応する箇所があり、oまたはその底本が参照されたようである

表１　村山党系図比較資料

No.	実名	a 東大本	b 安永本	c 尊経閣A	d 観瀾閣本	e 菅家A	f 日比谷本
42	□□	*系線有 □□*	系線無 □□	同左	同左	同左	同左
51	□	*□□*	□	同左	同左	同左	同左
57	経親	*無し*	五	同左	同左	同左	同左
71	信泰	*五左*	三左	同左	同左	同左	同左
77	重信	*金*	余一	同左	同左	同左	同左
93	實信	山口弥平	山口弥十	同左	同左	同左	同左
108	廣□	*系線有り*	系線無し	同左	同左	同左	同左
128	長高	*太*	二太	同左	同左	同左	同左
146	康高	*左入*	太左入	同左	同左	同左	同左
0	名字 列記	須黒 難波田 久米無し	同左	**須黒 難波田 横山の下に久米**	**須黒 難波田 仙波の上に久米**	**同左**	**須黒 難波田 横山久米仙波**
7	高範	＊記述a	同左	**傍記･注記無し**	**同左**	**同左**	**同左**
10	家忠	金子十郎 本	同左	金子十 本	同左	同左	同左
15	（某）	無し	同左	**□□**	**同左**	**同左**	**同左**
16	重高	左	同左	**二左**	**同左**	**同左**	**同左**
32	恒盛	傍記無し	同左	**三**	**同左**	**同左**	**同左**
70	元信	二兵	同左	**三兵**	**同左**	**同左**	**同左**
72	有信	傍記無し	同左	**二**	**同左**	**同左**	**同左**
74	国信	十八	同左	**十入**	**同左**	**同左**	**同左**
109	家高	小七郎	同左	**小七**	**同左**	**同左**	**同左**
119	實高	大平太	同左	**大井太**	**同左**	**同左**	**同左**
8	（某）	無し	同左	□□無く 難波田小太	**□□ 難波田小太**	**□□ 難波田小太 朱字 弾正祖**	**□□ 難波田小太**
37	忠村	傍記無し	同左	**八**	**同左**	傍記無し	同左
53	時綱	平内五	同左	**平内左**	**同左**	平四左	同左
2	頼家	傍記無し	同左	同左	**”同”**	**同左**	**同左**
38	忠時	傍記無し	同左	同左	**十**	**同左**	**同左**
78	景家	傍記無し	同左	同左	**兵七**	**同左**	**同左**
83	義継	山口	同左	同左	**山口四**	**同左**	**同左**
87	□□	□□　太	同左	□□　大	**□□　七**	**同左**	**同左**
100	直家	二馬允	同左	同左	**六馬允**	**六右馬允**	**六馬允**
104	家時	傍記無し	同左	同左	**同左**	**同左**	**同左**
110	家時	久米右近将 太左　承久	同左	同左	**久米左近将 太左　承久**	**久米左近将監 太左　承久**	**久米左近将 太左　承久**
118	長高	二太	同左	同左	**三太**	**同左**	**同左**
120	家賢	傍記無し	同左	同左	**八**	**同左**	**同左**
134	時綱	仮名無し　記述d1	同左	同左	**二入　記述d1**	**同左**	**同左**
147	行氏	**行氏 傍記無し**	**同左**	**同左**	行成 傍記無し	同左	同左
131	時家	**太**	**同左**	**同左**	大	*六*	大
43	義景	傍記無し	同左	同左	同左	**六**	**同左**
75	頼信	孫七	同左	同左	同左	**孫四**	**同左**
88	實慶	山口土左房	同左	同左	同左	**山口土佐房**	**同左**
89	為行	**二**	**同左**	**同左**	**同左**	傍記無し	同左
98	恒高	大	同左	同左	同左	**太**	**同左**
140	泰盛	**五**	**同左**	**同左**	**同左**	二	同左
91	行直	平三	同左	平二	平三	同左	平二
92	行茂	五三	同左	同左	*五二*	五三	同左
142	安成	傍記無し	同左	同左	*欠*	傍記無し	同左
143	行成	傍記無し	同左	同左	*欠*	傍記無し	同左
3	家綱	大井五大夫	同左	同左	同左	*大井五太夫*	大井五大夫
19	家氏	十左　出	同左	同左	同左	*十左*	十左　出
39	近範	金子余一 本家元	同左	同左	同左	*金子余一 木 家元*	金子余一 本家元
61	基綱	大左	同左	同左	同左	**六左**	大左
66	季継	大井二 又山口二	同左	同左	同左	*大井二 又山口*	大井二 又山口二
23	廣綱	太左	同左	同左	同左	同左	*傍記無し*
24	頼廣	宮内左	同左	同左	同左	同左	*傍記無し*
59	家時	五	同左	同左	同左	同左	*傍記無し*
60	家親	六	同左	同左	同左	同左	*傍記無し*
67	季信	山口大	同左	同左	同左	同左	*山口太*

記述a　難波田小太郎　東鑑金子小太郎
記述d1　害康高出家逐電後出来

表２　第１群諸本の比較

No.	実名	g 昌平校本	h 弘化本	i 尊経閣B	j 静嘉堂本	K 復元塙本	n 山中本	o 諸姓分脈系図
0	（名字列記）	順黒 難波田 横山の下に久米	須黒 難波田 横山の下に久米	順黒 難波田 横山の下に久米	同左	同左	須黒 難波多 出現順整列	無し
7	高範	難波多小二郎	難波多小大郎	難波多小二郎	同左	同左	難波多小太郎	難波多小二郎
78	景家	兵衛二郎	兵衛七郎	兵衛二郎	同左	同左	兵衛七郎	兵衛次郎
130	安家	守家　三郎入道	安家　三郎入道	守家　三郎入道	同左	同左	安家　三郎入道	同左
153	行重	小太郎	八大郎	小太郎	小太郎	小太郎	八太郎	小大郎
158	忠行	五郎	大郎	二郎	二郎	二郎	太郎	無し
145	時員	左近将監	右近将監	同左	同左	同左	左近将監	右近将監
102	行直	左衛門尉 為頼高子又須黒ﾄﾓ云	左衛門尉 為頼高子又勝呂ﾄﾓ云	同左	左エ門尉 為頼高子又勝呂ﾄﾓ云	左衛門尉 為頼高子又勝呂ﾄﾓ云	又勝呂 左衛門尉 為頼高子	左エ門尉 為頼高子須黒
3	家綱	大井五太夫	同左	大井五大夫	大井　五郎太夫	同左	大井五大夫	大井五郎太夫
39	近範	金子金一　本家元 記述c1	同左　朱書余	同左	同左	同左	余一　本家元 記述c1	本家元　金子余一 屋島軍功
123	信恒	太郎	大郎	太郎	大郎	太郎	同左	同左
127	重信	六郎左	同左	太郎左	同左	同左	太郎左衛門尉	太郎左
105	安家	六郎	同左	太郎	同左	同左	同左	六郎
111	泰家	三六郎	同左	三太郎	同左	同左	同左	三大郎
118	長高	三六郎	同左	三太郎	同左	同左	同左	三九郎
120	實高	大井六郎	同左	大井太郎	大井大郎	大井太郎	同左	大井六郎
124	高経	六郎兵	同左	太郎兵	大郎兵	太郎兵	太郎兵衛尉	大郎兵衛
128	長高	二郎六郎	同左	二郎太郎	同左	同左	二郎太郎	二郎六郎
67	季信	山口六郎	山口大郎	同左	同左	同左	同左	山口六郎
82	□□	某　大井六郎	某　大井大郎	某　大井太郎	某　大井大郎	某　大井太郎	同左	大井六郎
139	盛勝	彦六郎	彦大郎	彦六郎	彦六郎	彦六郎	彦太郎	彦六郎
8	（某）	某　難波多小六郎	某　難波多小太郎	同左	同左	同左	同左	小大郎
12	時家	六郎	太郎	同左	大朗	同左	太郎	大郎
13	時重	六郎	太郎	同左	大朗	同左	太郎	大郎
17	重氏	二郎左	三郎左	同左	同左	同左	三郎左衛門尉	三郎左
31	忠能	二郎	大郎	太郎	太郎 親恒から線欠く	大郎or太郎 親恒から線欠く	同左	無し
40	近吉	六郎	大郎	太郎	大郎	同左	太郎	二郎
54	親成	小二郎	小大郎	小太郎	同左	同左	同左	無し
70	元信	三兵衛門	三兵永尉	同左	三兵エ尉	三兵衛尉	同左	三兵衛
84	高義	山口四六郎	山口四大郎	同左	同左	同左	四太郎	山口四太郎
85	高信	平六郎	平大郎	平太郎	平大郎	同左	同左	同左
86	信季	弥六郎	弥大郎	弥太郎	弥大郎	同左or弥太郎	孫太郎	弥太郎
90	信茂	二六郎	二大郎	同左	同左	同左	同左	同左
92	行茂	五六郎	五三郎	同左	同左	同左	同左	同左
95	實茂	六郎	九郎	同左	同左	同左	同左	同左
125	高綱	兵衛六郎	兵衛大郎	兵衛太郎	兵エ太郎	兵衛太郎	同左	兵衛大郎
131	時家	六郎	大郎	同左	同左	同左	同左	同左
146	康高	六郎右衛門入道 為時経生害	大郎右衛門入道 為時経生害	同左	同左	太郎右衛門入道 為時経生害	同左	同左
149	光時	弥三郎	弥二郎	同左	同左	同左	同左	無し
152	行盛	五郎 時安から系線	大郎 安行から系線	同左	同左	太郎 安行から系線	同左　家茂の左	同左
155	資行	孫三郎	弥三郎	同左	同左	同左	同左　家綱の左	同左
156	家綱	弥三郎	孫三郎	同左	同左	同左	同左	同左
157	家行	承久中治流死 三郎	承久宇治流死 三郎	同左	同左	同左	同左	無し
45	近成	傍記無し	近成への線欠く	近成への線有り	同左	同左	同左	同左
112	家盛	久米孫太郎	久米弥太郎	久米孫太郎	同左	同左	孫太郎	久米孫太郎
122	信平	平太郎	平大郎	平太郎	同左	同左	同左	同左
136	氏安	太郎	大郎	太郎	同左	同左	同左	傍記無し
63	近頼	小四郎	同左	同左	同左	同左	親頼　小四郎	小四郎
11	家高	大蔵丞 建暦和田方誅	同左	同左	同左	同左	大蔵允 建暦和田方誅	大蔵丞 建暦和田方誅
52	親時	平内	同左	同左	同左	同左	傍記無し	平内
60	家親	六郎	同左	同左	同左	同左	太郎	六郎
83	義継	山口四郎	同左	同左	同左	同左	義綱　山口四郎	義継　山口四郎
107	□□	某　廣屋六郎	同左	同左	同左	同左	廣屋太郎	廣屋六郎
110	家時	久米左近将監 太左近将監承久	同左	同左	同左	同左	同左	久米左近兵エ 承久乱功

表３　第２群諸本の比較

No.	実名	p 系図纂/昌	q 続類従
14	時光	六郎	**六郎　出家**
19	家氏	十郎左衛門尉	**十郎左衛門尉 出家**
42	□□	無し	**某**
51	□	無し	**某**
52	親時	**平内**	親持 平内
67	季信	山口大郎	山口太郎
70	元信	左郎兵衛	**三郎兵衛尉**
71	信泰	**三郎左衛門尉**	三郎
72	有信	**二郎**	傍記無し
77	重信	**余一**	余[朱書一]
83	義継	**山口四郎**	小口四郎
99	頼高	**須黒左衛門尉**	須黒左衛門尉　又号勝呂
108	廣□	無し	**廣丶**
119	實高	傍記無し	**大井太郎**
134	時綱	二郎入道　記述d3	二郎入道　記述d4
141	盛経	傍記無し	**兵衛二郎**

記述d3 殺康高而出奔後雉深　記述d4 殺康高而出奔後雉源

表４　第３群諸本の比較

3.比較の方法　系図に登場する人物とその関係は諸本でほとんど一致する[*4]。人物が最も多い続群書類従に基づき、長系優先の原則によって169 まで番号を振った。以後、No.のみ(または実名を付記)で指示する。主なところでは、6 金子家範、64 山口家継、121 仙波家信となる。

同じ系図位置を比較すると、諸姓系図をのぞき人物の有無や実名の相異は少ない。主な違いは、傍記された仮名(通称)・事績である。第 1 群の“三左”を第 2 群が“三郎左”、第 3 群が“三郎左衛門”と表記するような違いや事績の記述の多寡は、各系統の表記方針である。三と五、入と八のような、誤写で生じた変異を比較した。太・大・六(郎)の変異が多いが、崩し字では区別困難な場合が多く、その差は重視しなかった。系線があるべきところに欠落するような場合、欠落する同士は近い可能性が高いが、欠落しないもの同士が近いとはいえない。容易に補訂できるからである。この他、系図冒頭の名字列記も比較した。

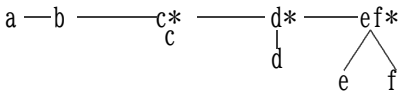
4.分類群内の比較-第１群　6 写本を比較し、53 箇所で意義のある差異を見出した(表 2)。

1 本のみが他と異なる場合(21 箇所)はその写本(またはその系列)の書写時の誤りであって、系統の判断には向かない。

複数の写本と複数の写本で記述が対立する場合を見ると特定のパターンに集中する。
ab：cdef 11 箇所、abc：def 13 箇所(うち 2 箇所は e のみ df と異なる)、adcd：ef 7 箇所、ab：cd：ef　3 箇所である（これ以外は abde：cf 1 箇所のみ)。いいかえると、b-c での違い 14 箇所、c-d 13 箇所、d-e 10 箇所となる。

孤立した差異は、a が 6 箇所、b は 0 箇所、c は 1 箇所、d が 3 箇所、e が 6 箇所、f が 7 箇所（c,f のみ他と異なる場合も計上)。

孤立した差異が生じる前の写本を想定し、相互の差異が少ない写本をつなげるようにすると、次のような関係になる（x* は x に近い想定写本)。



単純には、図の左右どちらかを起点に変化したと思いがちだが、中間を起点に両方向へ分岐した可能性も有る。差異の質を見ると、b ～ f の「五」が a は傍記無し、「二太」が「太」、「太左入」が「左入」と、字が減るような差異が多く、転写もれとした方が理解しやすい。同様の差異は b-c 間にも認められる。c-d 間でも c 側に傍記(または仮名)が無いという差異が多く、逆は無い。d-e 間では、d 側に傍記欠けるのが 1 箇所、e 側が 2 箇所である。f の孤立した差異では傍記を欠くものが多い。これらからは、d または e が第 1 群祖本に近いと仮定できる。

5.分類群内の比較-第 2 群　本稿の第 2 群にあたる写本について、渡は、根岸本(m)と邨岡本(l)がいずれも「塙氏本」を書写したものであることを指摘している。菅本 B(k)も同様であり、また、当然のようであるが、続群書類従の校注(イ)も、上記 3 者と共通する。これらを 2 群塙本系と仮称しよう。他本との比較は、上の 3 写本の比較に基づく“推定塙本”(K)によることとする。塙本の底本は新井白石旧蔵本とされるが、その記述の裏付けは知らないので「伝白石本」としておく。

寛政八年(1796)書写の塙本、文化十年(1813)の昌平校本(g)、弘化四年(1847)の弘化本(h)の関係は明らかと言いがたいが、ある特徴を持った写本に至ることは確実である。すなわち、138 仙波盛直に「父〻〻(不見)九年」という傍記がある。これは第 3 群の「文永九年」に対応するから、ある写本の「文永」が汚損した状況に由来する。

孤立した差異や大・太・六の違いを除いた、複数の写本が対立する差異は、10 箇所にあった(表 3)。うち 3 箇所は、内容から、少数派が個々に生ずる可能性が少なくないため、比較に意義が高いと評価するのは 7 箇所となった。そのうち 6 箇所の記述で h,n 対その他という対立になり、2 系に分けることができる。145 仙波時員は、g と n のみが左近将監とし、別個に生じた誤写とせざるをえない。

6.他群との比較による群内の評価　各群内で差異がある場合、たいていの場合、そのいずれかが他群での表記と共通している。一方、群内で差異が無いが他群とは異なるという場合もある。他群と共通する表記が多い写本は、その群の祖本に近いか、逆に他群の祖本に近いと評価でき、重要である。

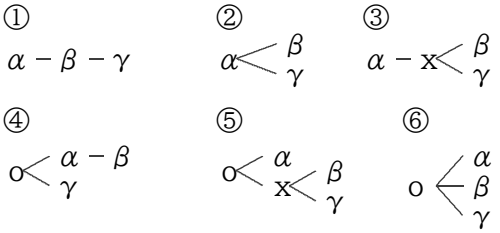
第 1 群の場合、b-c 間の差異では c 側が他群と共通し、c-d 間でも 1 例をのぞき d 側が他本と共通する。d-e 間では、明確な差異がある 5 箇所の内、d 側が他群と近いのは 2 箇所、e 側は 3 箇所である。ここでも d-e 間に第 1 群祖本を仮定すると理解しやすい。

第 2 群の場合、前項の注目箇所で、h,n 側が他群と近いのは 5 箇所、他側は 1 箇所である。村山党系図全体で見ると、h,i,j,K が他群との差異が少ない。

第 3 群の場合、2 本の記述が異なる 16 箇所の内、系図纂/昌が他群と共通するのは 6 箇所、続類従は 8 箇所である(表 4)。他群と異なる表記は、字の相異 3 箇所、字が少ないもの 4 箇所、傍記がないもの 3 箇所、人物の欠落 3 箇所となる。おおむね、他群と共通する表記の方が祖型に近いと見られる。

7.分類群間の比較　各群の祖本 3 点を仮にα, β, γ(1 ～ 3 群がどれにあたるかはあとで検討する)とした場合、その系統関係としてありうるのは、次の図に示した 6 種である。

図では、直近共通祖本が別にある場合は o、他の分岐点がある場合は x とした。この図は 3 点の系統関係を示すのみであり、線でつないだ写本が直接の親子という意味ではない。数代の伝写があっても、3 点の比較に意味がある分岐がないかぎり、1 本の線となる。



No.	名字	実名	第1群	第2群	第3群
81	山口	□□	*荒波多*	某　荒波多三郎	某　荒波多三郎
151	仙波	安行	*馬允*	右馬允	右馬允
7	金子	高範	傍記･注記無し	難波多小太郎	小太郎
8	難波田	（某）	□□　難波田小太	某　難波多小太郎	某　難波多小太郎
9	難波田	（某）	無し	某　難波多弾正	某　難波多弾正
31	金子	忠能	右	太郎or大郎	太郎
108	山口	廣□	廣□	廣丶	廣丶
138	仙波	盛直	属平時村誅	父丶丶[不見]九年 依属平時村誅之	文永九年座党北條時村而誅
39	金子	近範	金子余一 本家元	*金子金一　本家元* *寿永二年屋島合戦高名*	金子餘一　記述c2
88	山口	實慶	山口土左房	*山口七左衛門*	山口土佐房
54	金子	親成	小六	小太郎	小六郎
95	山口	實茂	九	六郎	九郎
130	仙波	安家	安家　二入	安家　三郎入道	安家二郎入道
146	仙波	康高	太左入	太郎右衛門入道 為時経生害	太郎左衛門入道 為時綱遭害
98	須黒	恒高	大or太	須黒太郎	太郎
102	山口	行直	左　頼高為子	左衛門尉 為頼高子又勝呂トモ云	[頼高から系線] 実直忠子 左衛門尉 頼高養為子
11	金子	家高	大蔵丞 和田方誅	大蔵丞 建暦和田方誅	*大蔵丞*
110	久米	家時	久米左近将 太左　承久	久米左近将監 太左近将監承久	*久米左近将監*
2	村山	頼家	”同”	”同”	村山貫首
15	金子	（某）	□□	某	某　金子大蔵丞
21	金子	（某）	無し	無し	某　六郎　承久乱溺宇治川而死
40	金子	近吉	太	太郎or大郎	餘一太郎　建保元年党和田氏被虜
97	山口	家恒	兵	兵衛尉	右兵衛尉
137	仙波	邏曜	傍記無し	傍記無し	法師
12	金子	時家	太	太郎or大郎	太郎承久乱有戦功
25	金子	忠澄	五	五郎	五郎承久乱有戦功
104	山口	家時	左	左衛門尉	左衛門尉 承久乱有戦功
123	仙波	信恒	太	太郎or大郎	太郎　承久乱溺宇治川而死
134	仙波	時綱	二入　記述d1	二郎入道　記述d1	二郎入道　記述d3or4
91	山口	行直	平三or平二	平三郎	平二郎

記述c2　与兄家忠攻衣笠城獲三浦与一首屋島之役射越中次郎兵衛盛嗣中其胸
記述d1　害康高出家逐電後出来　　記述d3,4　殺康高而出奔後[3雉探 4雉源]
137「邏」は糸偏が無い形だが、他に用例が見つからないため略字としておく

表5　群間の比較

第 1 ～ 3 群の想定接続写本を比較すると、各群の方針による表記の繁簡以外の差異は 25 箇所にあった（表 5）。

第 1 群が特異な 8 箇所の内、情報が減るのは 2 箇所、新旧の判断ができないもの 3 箇所、難波田氏に関するもの 3 箇所（次節以下で検討する）だった。

第 2 群が特異な 8 箇所の内、独自の変異と判断するもの 2 箇所(39,88。いずれも、第 1 群と共通する表記から誤写したと推定できる[*5])、1 文字の異同で新旧が判断できないもの 4 箇所、第 2 群が情報量の多いもの 2 箇所(98,102)だった。98,102 は第 2 群でセットで追記された可能性があり、他群との新旧判断はできない。

第 3 群が特異な 9 箇所の内、他群に記される事績を欠き、独自の変異であろうもの 2 箇所(11,110)、事績以外の記載が他群より充実するもの 5 箇所(15,21,40,97,137)、新旧が判断できないもの 2 箇所だった。このほか、134 は第 2 群と第 3 群で異なり、第 1 群で両表記が入り乱れて併存するという例で、同一箇所で複数回の変異を想定せざるをえない。

3 つの群とも、独自の後出的変異が複数あるため、先の系統関係の内①,②,③,④ではない。第 3 群のみ先出的な 5 箇所は、一つ一つは先出と断ずる程でない。しかし、後出とするにはそれぞれ別の原因で説明することになり、可能性は低い。そうすると、系統関係は⑤で、α に第 3 群想定接続写本を置くこととなる。第 1,2 群の独自表記はほぼ後出的と評価することになる。

8.共通祖本について　3 つの群の共通祖本を想定すると、それに一番近いのは第 3 群想定祖本といえる。

だが、共通祖本が第 3 群とまではいえない。第 2 群や、別群ということもありうる。ただし第 1 群でないとは考えられる。

138 仙波盛直の傍記に再注目する。第 2 群の「父丶（不見）丶九年」は第 3 群の「文永九年」に対応することを先述した。年紀に続け、第 2 群は「依属平時村誅之」、第 3 群は「座党北條時村而誅」とする。第 1 群にも「属平時村誅」とあるから、年の有無のみは実質同じといえる。しかし、この年に問題がある。

文永 9 年（1272)の二月騒動で当事者となった北条氏は北条時輔および、(名越)時章・教時であり、北條時村が討たれたのは嘉元 3 年（1305)の嘉元の乱である。年紀と人名のいずれかが誤っている[*6]。従って、第 2 群と第 3 群の記載が独立に生ずることは考えにくく、共通祖本にも文永九・時村の表記があっただろう。第 1 群祖本の編者はこの矛盾に気付き、系図上の世代から妥当と見える「時村」を活かしたのだろう。第 1 群が簡素な傾向は、祖本に近いからでなく、簡潔で見通しのよい系図を編成した結果と考える。とすれば、3 つの群の共通祖本は第 2 群または第 3 群に近似していただろう。

以上はあくまで、分析した(村山党系図)写本群の、直近の共通先祖の想定であって、系図の祖型という意味ではない。

2）難波田氏の記載例

難波田氏に関する記載は、写本間で、単純な誤写で説明できない差異がある。原本は縦書きだが、横書きにして比較する。

1.続群書類従　国立公文書館所蔵 216-0001。活字化されており、富士見市史も同書から転載。高範の仮名（けみょう）に朱字で二郎と校注される。高範の子から難波田とする。

高範―小太郎（二郎）―某―難波田小太郎―某―難波田弾正

2.諸家系図纂　国立公文書館所蔵 156-0001。大日本史編纂のため水戸藩が集めた系図集の写であり原本(元禄 5=1692 成立)は戦災で失われた。「七党系図」としてまとまっていないが、各党の系図が氏姓別に収められている。

小太郎　難波田　難波田弾正
高範―――某―――某
小太郎

3.昌平校本　国立公文書館所蔵 157-0040。高範から「難波多」とし高範の子を小六郎とする。

難波多　難波多
小二郎　小六郎　難波多弾正
高範―――某―――某

4.邨岡本　国立国会図書館 831-120。高範の子を小大郎とする。

難波多　難波多
小二郎　小大郎　難波田弾正
高範―――某―――某

5.本朝武家諸姓分脈系図　国立国会図書館 838-116。田畑吉正の編纂とされる*7 膨大な系図集。野与と題する系図に村山党も含む。

難波多小二郎　小大郎
高範―――――某―――弾正

6.根岸本　国立国会図書館 841-154。高範の子を小太郎とする。また小二郎を小太郎とする異本(イ)もあることを注記している。

イ太
難波多小二郎　小大郎　弾正
高範―――――某―――某

7.弘化本　埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵 2012-0007。企画展準備の過程で熟覧した。高範を小大郎、その子を小太郎とする。

難波多　難波多
小大郎　小太郎　難波田弾正
高範―――某―――某

8.菅本 A　茨城県立図書館蔵。高範の子を実名不明の小太(郎)とし、弾正祖と朱注がある。観瀾閣本、日比谷本も本文は同様だが柱はない。

難波田
小太
高範―――□□　弾正祖(朱書)

9.尊経閣 A　尊経閣文庫。年代不明。高範の子を難波田小太(郎)とする。

高範――　難波田
小太

10.安永本　国立公文書館所蔵 157-0039。第 1 群で最古の紀年をもつ資料。高範の子ではなく、高範自身に難波田小太郎と付された形で、東鑑で金子小太郎とされることも注記される。

高範　難波田
小太郎　東鑑金子小太郎

3）難波田氏の記載の評価

1.当初の評価　高範のみを記載する 1 群 a,b と、弾正まで記載する 2・3 群の開きは大きい。萩原は弾正を記載する続類従について“あきらかに、享禄・天文期の名将難波田弾正を強いて付会したもの”とした。同感する。1 群 a,b は高範の異名を傍記とせず、実名の下に置く。これを系線を書き漏らした異世代と見れば菅本 A の墨書のようになり、菅本 A の朱書を含めて短絡的に系図表現すると第 2･3 群のようになる。

2.系統推定による見直し　しかし、前節で推定した、表記の成立順序は逆転する。あらためて、第 1 群 a,b を見る。「東鑑 金子小太郎」という記述は、簡素を旨とする第 1 群には珍しい。「難波田小太」に疑問をいだき、調べた結果を注したものであろう。第 1 群祖本の段階で「弾正」を失うのも、不自然な人物として削ったのではなかろうか。村山党系図の中で高範らは目立った位置にあり、考証による加除筆が行われやすかったのではなかろうか。

3.さらなる祖本への推量　「弾正」が戦国武将への付会という見解による限り、「共通祖本」も近世に下ると考える。その前の姿に少しでも近付くことはできないか。

注目したのは、系図冒頭の名字羅列である。

続類従では、系図の右から左へと登場する順に整列されているが、「共通祖本」では村山、大井、宮寺、金子、山口、須黒、横山、久米、仙波、廣屋、荒波多、難波田という順であり、登場順そのままではない。しかし、関係はある。

村山から仙波までの順番は、登場する順番と矛盾しない。主要な家である金子・山口・仙波はこの中に含まれる。続けて、山口の支族扱いで1代のみ同然の廣屋・荒波多が登場順に並ぶ。最後に、系図冒頭に近い難波田が置かれる。これは、名字列記の成立過程を示すように見える。村山～仙波の系図に、廣屋・荒波多を追記し、さらに難波田を追記したのではなかろうか。

東鑑では、1189 年の奥州合戦で「金子小太郎高範」、1221 年の承久の乱で「金子小太郎」が記載される。両者を別世代と見れば

小太郎　小太郎
高範――某

という系図になる。これが原型だったのではなかろうか。

高範は、系図では十郎家忠の兄と扱われるが、保元・平治の乱での活躍が著名な家忠より約 30 年後に登場する。このため、家忠の兄（太郎）の子と推定されている(井田・峰岸 1982)。太郎と十郎の年齢差も考えると、もう1世代下の可能性もあるだろう。

金子家の本流として金子家部分の系図原型を作ったであろう家忠系は、高範やその子孫を系譜として把握していなかったことになる。

なお「共通祖本」の本文が「難波多」となるから、弾正が著名となる前から「難波多小太郎」が記されていた可能性がある。

４）まとめ

門外漢なりに系図を分析してみた。村山党系図全体の分析結果が、当初の予想をひっくり返した。他の系図も含めて七党系図全体を分析すればさらに異なる結論となるかもしれないが、筆者はここまでにとどめ、後生にゆだねたい。

注

*1　加藤は、諸家系図纂の野与党村山党系図に畠山牛庵蔵本から写した旨の奥書があるとしたが、戸沢氏系図直後の奥書であり、野与・村山党にも係るかは疑問がある。

*2　渡(2017)の存在は、新井浩文・根ヶ山泰史両氏の御教示により知った。

*3　神宮文庫所蔵本は写も見ていない。長野県立歴史館所蔵（県立長野図書館より移管）の丸山清俊旧蔵本 2 例を埼玉県立文書館 CH 本で観察したが、安永本の忠実な写と、塙本系の 1 例であった。

*4　一部の写本で系線のつなげ方が異なるが、個別的な誤写にとどまっている。

*5　88 は、七と土、衛門と房が対応するのは明らかである。七左衛門なら普通の仮名で、土左房は特異である。書写者は仮名という前提で傍記を読むから、前者から後者へ読み間違えるよりも、後者から前者へ読み違える方が起こり得る。

*6　承久の乱の戦死者より 3 ～ 4 世代下にあたるので、嘉元の乱とするのが本来の所伝の可能性が高い。

*7　宝賀寿男 2020「江戸後期の譜牒学者、田畑吉正」http://wwr2.ucom.ne.jp/hetoyc15/kodaisi/gennten/tabatal.htm

引用文献

井田実･峰岸純夫,1982.03,「中世/武士のおこり/難波田氏の成立」,『富士見のあゆみ』,158-159,富士見市

伊藤一美,1975.05,「武蔵七党 -七党系図成立に関する一試論-」,武蔵野,53(3),20-28,武蔵野文化協会

萩原竜夫,1986.02,「武蔵七党系図」『群書解題 第1巻(系譜部)』,,161-167,続群書類従完成会

加藤功,1989.09,「前島博士旧蔵本『武蔵七党系図』について」,武蔵野,68(1),43-56,武蔵野文化協会

菊池紳一･加藤功,1991.02,「中世系図解題」,『新編埼玉県史 別編 4　年表・系図』,848-837,埼玉県

渡政和,2017.03,「埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『武蔵国七党之系図』について」,埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要,(11),96-83